

「中華台北」（チャイニーズタイペイ）という名称でオリンピックに参加している台湾は、先のアテネオリンピックで、ついに悲願の金メダルを獲得した。

表彰式において、台湾史上初の金メダリストとなった女子テコンドーの選手は、莊重なメロディにのつて、するするとあがった旗に向かい、きりりと敬礼をして、ひとすじの涙を流した。

彼女が見あげているのは、「晴天白日」



に五輪をあしらった大会旗である。オリンピックなどの国際スポーツ大会のみに登場する旗であるが、中央の晴天白日のマークは、中国国民党の党章にほかならない。

国民党の二党独裁に幕が下りてまもなく20年。政権党の座を降りてからも5年になる。が、軍を始めさまざまな機構でこのマークが台湾の象徴として使

首枷から逃れられない台湾の現状を象徴しているかのようなのである。

台湾と中国国民党との間には、もとも何の縁もなかった。日本の植民地だった台湾は戦後、蒋介石率いる中国国民党の支配下におかれることになった。さらに、内戦に敗れた政権装置そのものが台湾に逃げ込んできたことから、この小さな島が国民党史そのものを呑み込む羽目になった。

第十九回——柳本通彦

異郷——

台湾の中の「雲南」



やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦(現代書館)」
「台湾革命(集英社新書)」など。
99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。

軍は中国大陸の南へ南へと追い詰められていく。蒋介石が百数十万の要人・軍人・難民を引き連れて台湾に逃亡し、内戦に決着がついたあとも、雲南省を越え、タイ・ミャンマー国境の山岳地帯に1万数千の部隊とその関係者が付近に点在する少数民族を巻き込んで、「祖国奪還」をスローガンに反抗を続けた。

この故事は香港において『異域』（アディ・ラウ主演、1990年）と題され、台湾の屏東県、桃園県、そして南投県の山間部に新しい村の建設と開拓を命じられた。その一つが、博望新村である。ここには、タイ・ミャンマー国境地帯を本拠とする複数の少数民族の末裔約200名が暮らしている。すでに三世も誕生し、漢化は防ぎようもないが、室内の調度、料理、風習の中にいまでも異郷の匂いを強く残している。そういうした異国情緒を売り物に、最近

は民宿や郷土レストランを開く家庭も多いという。

村の中央の広場に立つ蒋介石の胸像が、いまでも、この数奇な運命を背負った村を見下ろしている。

最近私は、そうした台湾の数奇な宿命を象徴している村を訪れる機会を得

た。台湾のほぼ中心、南投県仁愛郷にある博望新村である。ここには、なんと、それこそ台湾とは縁もゆかりもないミャンマー（ビルマ）の少数民族が住んでいるのである。

日本の無条件降伏と同時に再燃した国共内戦は、人民解放軍が優勢に戦いをすすめる、40年代末になると、国民党

て映画化もされているので、ごらんに

なつた方もいるかもしれない。いわゆる黄金の三角地帯に居座った彼らの存在は、麻薬問題も絡んで国際社会の関心を集め、1960年代になって国民党が、部隊の台湾への撤退を命ずるに至る。そのとき、国民党の将兵は、妻にしていた少数民族の女性やその子らを連れて台湾に渡ってきた。

彼ら数百名は、三つのグループに分け



標高2000mにある博望新村を望む(上)。村の家々の玄関にある番号表示にも異国情緒が(右上)